

調査対象	かえる農園 石井伸弘	団体代表者名	石井伸弘
設立年	2008年2月	団体URL	http://www.nexyzbb.ne.jp/~ishiike/
活動地域	岐阜県本巣市北野、岐阜市川部、愛知県愛西市など6カ所、5反の畑	調査員	曾我部、茶原、今枝、松井、澤村、近藤、山崎、石井良規、宮前洋一・保子、植田、浜口
取材日	2010/11/24	レポート作成者	浜口美穂
「ニッチマーケットの探索」を今度は農業で			
<p><活動の歴史と現在の活動内容></p> <p><活動の歴史></p> <p>○学生時代は「エコ・リーグ(全国青年環境連盟)中日本ブロック」事務局長として活動。環境就職情報誌「えこわーくStation」を発行する。在学中より中間支援NPO「市民フォーラム21・NPOセンター」の設立に携わり、最初は理事として、大学院修了後(1997年)からは職員として勤務。</p> <p>○2005年6月に職場結婚。自分のマネジメント能力と組織が求める能力に差ができ、2006年3月に退職。</p> <p>○次に何をやるかを考えるとき、チラシの裏に「何をやりたいか」「何がやれるか」を書き出す「ひとりワークショップ」を行い、その中に「農業」があった。NPOをやりながらも農業には関心があったことを思い出す。論理的にどうこう考えて農業を選んだ訳ではない。</p> <p>○今までのご縁により岐阜市で20年にわたり有機農業を営む宮崎達博さんを紹介され、2006年5月から2年間研修。2007年12月に北方町に居を構え、2008年2月から畑を借りて農業を始める。</p> <p><現在の活動内容></p> <p>○宮崎さんから教えを受けた有機栽培の方法で、年間約50～60種の野菜を栽培(常時10～15種類)。販売形態は、個人宅配(セット販売)、直売所での販売、有機農産物宅配業者「名古屋生活クラブ」への卸し、近隣のレストランやデリなど3～4軒に販売など。</p> <p>その他、農業体験や味噌・どぶろくづくり教室、料理教室なども実施し、好評。</p> <p>○浜松学院大学で「外国人支援リーダー養成講座：NPOプランニング」の非常勤講師(2010年10月まで)。</p> <p>○名古屋のNPOの仕事</p> <p>本人いわく「農業以外の仕事は出稼ぎ」。軸足は農業に。時間的には「農業8割、NPOなどの活動2割」、所得は「半々」。</p>			
<p><農園のモットー(何を大切にしているか)></p> <p>生きものがいっぱい畑にしたい。農園の名前をつけるときに、どの生きものに代表させるか考えて「かえる」に。“かえる”を殺さない。土に“還る”。安心な野菜に“替える”。気軽に“買える”。よみ“がえる”(自分を含めて)。</p>			
<p><転職で変化したこと></p> <p>○「失ったものはない」「得たものは時間」。夫婦ともにNPOで働いていたらとても子育てはできなかったが、今は子育てができ、人間的な生活ができる環境にある。</p> <p>○NPOの時は組織のミッションが自分のミッションだと思っていた。今は生活すること、食えるようになることが大切。</p> <p>○学生の頃は上段から社会を変えることが、自分の人生だと思っていた。今もそれは大事なことだと思っているが、自分と家族が穏やかに暮らせること、小さな範囲から気持ちのいい関係を広げていくことも大事だと思っている。</p> <p>○一人の力量でやれる今は「楽ちん」。自分に合っている。</p>			
<p><連携している団体・専門家・自治体など></p> <p>○町内会、消防団には入っているが、地域のつながりはそれほど濃くない。今のところ、自分がリーダーとなってNPO活動を行うことは考えていない。</p> <p>○師匠の宮崎さんは今でも教えを請う関係。</p> <p>○名古屋の中間支援NPO</p> <p>○岐阜の環境NPO、中間支援NPO等</p>			
<p><現在直面している課題></p> <p>大量に野菜を欲しいという人に対応できていない。それには人を雇用しないとダメ。一人の気楽さと人を雇ったときの重圧をはかりにかけている。</p>			
<p><今後やってみたいこと></p> <p>技術を安定させ、売り先も増やして、農業所得を増やす。それができれば人を雇うことも可能(選択肢の一つとしてはある)。</p>			
<p><そのためにはどんな情報・人脈が必要か></p> <p>「日々、失敗」。失敗することが学ぶこと。本に書いてあることは後追いでしかない。</p>			

＜チームオリジナルの質問＞	
質問内容:	日本の農業政策についてどう思うか。
答え:	<p>政策については考えることはなくはないが、自分でもこれだ、という結論はない。</p> <p>現在でも農業従事者の平均年齢は65歳を超えている。黙っていてもすぐに日本の農業の終えんはくる。今のような補助金付けでもたせるくらいなら、一切の農業支援をなくしてつぶれるところはつぶれればいい。一定の規制だけ残して、最大限、自由にやらせればいい。様々な成功や失敗ができるなかで、良い取り組みを政策化すればいい。ただし、穀類(特に一定程度の競争力がありうる米)は海外との競争を考えると、自給力の確保の観点から大規模農家への所得保障などが必要だろう。農業を守るべきで、農家を守るべきだとは思わない。</p> <p>ちなみに、国内の農業生産額は約8兆円。どんな政策になろうと、自分が5百万円や1千万円くらいの売り上げを出すことのできるニッチマーケットはあると思う。根拠なき確信だが。</p>
＜その他、調査者からのメッセージ＞	
<p>NPOで働くことにこだわりはない。NPOに勤めたのはたまたま仕事があったから。ただ、ゼロからカタチにしていこうとは思っていた。</p> <p>ずっと取り組んできた「環境」には今もこだわりがある。</p>	
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div> <p>岐阜市川部の畑にて。畑で出会ったおばあさんに「畑を貸してほしい」と交渉したところ、すぐにタダで貸してくれることに。おばあさんの住所は知らないという。一人目でうまくいったため、その後も使われていない畑を探して直接交渉をしているがダメ。しかし、そんな偶然の出会いにも「根拠なき確信」を持っているようだった。</p>	
＜執筆者の感想(心に残ったこと)＞	
<p>名古屋時代の石井さんを知っている調査員が多かったせいか、調査員それぞれが勝手なストーリーを抱いて臨んだ調査は今回が初めてだったのでは。多くの調査員が、石井さんに、今まで勤めていたNPOから農業への転身に深い意味づけ(NPOの仕事の総括と新たな目標設定?)を求めていたようだ。そういう意味では、石井さんの調査を通じて、調査員の人間ウォッチングもできたような気がする。</p> <p>石井さんの答えに肩すかしをくらい、消化不良の思いを残した調査員がいた中で、学生時代からの石井さんを知っている筆者は「石井さんらしいな」と納得した。学生時代からNPO、今の農業生活を通して共通するものは、「ニッチマーケットを探索していること」、「ゼロからつくりあげるおもしろさを味わっていること」。しかも、自分のこだわりである「環境」の視点は持ち続けている(環境問題に関心を持ったのは小学生のときという筋金入り)。変わったのは、活動の場が「暮らし」になったことでは。</p> <p>10年前、環境情報紙の取材で石井さんのインタビューをしたことがあった。2000年、当時27歳の石井さんは、「市民フォーラム21・NPOセンター」の事務局スタッフで、環境就職情報誌「えこわーくStation」の代表、そして、立ち上がったばかりの「市民の発電をすすめる会」のメンバーとして、NPOセンターの入っているビルの屋上に太陽光を利用した市民共同発電所をつくる計画を進めていた。当時の収入は10万円。でも、「メシ食えて家があれば十分」と笑っていた。そのときのインタビューの最後はこう結ばれている。</p> <p>「結局、“たちあげ屋”なんですよ。組織を立ち上げるところはやるけど、“かため屋”じゃない。組織を固めるのが必要な時期にはそういう人が入ってくるだろうし、そこまで持っていけたら自分の役割は終わりだと思う。あんまり将来のことは考えないけど、実家に帰ったとしても、環境関係の市民運動はやるだろうね。その瞬間、その瞬間、自分が楽しいと思えることをやるだけなのかなあと思ってる」</p> <p>それから6年後、この言葉どおりにNPOでの自分の役割を終えた石井さんは、次の活動の場を「農業」と「暮らし」に置いた。さて10年後、石井さんは何を楽しんでいるだろうか。</p>	